

〈さようなら 久永東輝夫先生〉



変わることなく

植野達郎

久永東輝夫先生は昭和55年に実践女子大学に赴任され、アレクサンダー・ポープを中心とする英詩の研究を続けられるとともに、学生の指導に力を込めてあたってこられました。私が赴任したころ、先生はテニスやスキーだけではなく、パソコンにも興味をお持ちでした。現在ではそれらに加えて、ウォーキングにいそしんでいるとのこと。私自身もテニスやスキーに手を染めたこともあります。現在でも続けている先生は一本芯が通っていると言えるのかもしれませんが。こうした先生の関心の持ちようは、期せずして時代にシンクロしているのではないのでしょうか。

先生とお話をしているときに話題になることが多いトピックが言葉をめぐめるものです。研究対象が詩であることを考えますと、言葉に強い関心をお持ちであることは不思議ではないのですが、言葉に関する話題が増えたということは、私が少しずつ先生の影響を受けたということでしょう。言葉に関することで一つ残念に思っていることは、先生から落語の口演の資料をたくさんいただいたのですが、それを聴くことがないまま時間が経ってしまったことです。私が聴いた数少ない噺家についてしかお話しできなかったことが心

残りですが、この話題については私の宿題とさせていただきたいと思っております。

思い返してみますと、先生と親しくお話しするようになったのは、興石先生にお膳立てをしていただいた旅行が契機になっています。特に、初回の尾道、しまなみ海道、丸亀への旅はとても印象深く残っております。それに続いて、仙台、作並温泉への旅も興石先生をまじえた楽しいものでした。また近年になって、立石寺、長岡、富山、塩釜などを巡りましたが、旅先でうかがったいろいろなお話が印象深く残っております。その中でも強く記憶に残っていることは、一年に一度、ご自分のためにお酒を嗜まれるというお話をうかがったことです。それは、現代の若い人が自分のためには特別な出費を厭わない風潮を先取りしているように見え、トレンドイだと感心したことを覚えております。

このようにしていろいろなエピソードを思い起こしておりますと、私の眼に映ずる先生の姿が浮かび上がってまいります。それは基本的に軸がぶれないということです。敷衍して言えば、周囲に阿ることを潔しとしないということでしょう。ご自分で一度決めたことは、生半可なことでは変更しないという意志の強さです。今回のご決断に際しても、強い気持ちが働いていたのではないかという思いが消えません。

余力を残して身を引かれる先生ですから、私には思いもよらないことをなさるのではないかという予感があります。それがどのようなものになるのかはお会いしたときの楽しみにさせていただきたいと思っております。これからも折に触れて、お話をうかがう機会を持つことができることを願っております。